



コルドバ歳時記への旅 ①

太田尚樹

聖と俗を使い分ける 南欧人の精神と暦

地中海に面した南欧では、燦々と輝く太陽の下、人々はゆったりとした生活のリズムの中で、温和な表情を浮かべている。人間の表情は気候風土と深く関わっているが、自然に対する人間の側の姿勢である、対抗と共生のあり方に依存しているようである。

アルプスの北側と違い、南欧でも特にスペインには大工業都市がないから工場の煙突がほとんどなく、車窓に醜い看板を見ることも少ない。この国は伝統的に大地に根を張った農村型で、牧畜のほかに葡萄やひまわり、オリーブ栽培、それに大西洋と地中海沿岸の漁業が中心になっている。そこにあるのは、いずれも時の移ろいに合わせた、自然と共生している姿である。

とスペインのサラマンカ大学が、神学部の設立を大学創立の年としていることでも、ある程度説明がつく。とりわけスペインでは、カトリシズムを国家理念の支柱とし、神への畏敬の念は人々の心的領域にも深く根ざしてきたからである。

負を正の心に換える見事さ

だがその一方で、彼らは逆のベクトルを働かせ、したたかなほど人間的な生き方をしている。言い換えれば、彼らは聖と俗を極めて巧みに使い分けてきた。人間の苦難を救済するはずのカトリシズムは、その正統教義が強調されるほど、反対に人々の心に重圧となっていたからだろう。

そこに見えるのは、彼らの複層化した精神構造である。信じるのは神の権威だけで、その他のあらゆる権力には反抗する不文律が成立し、享楽を優先する思考が育まれていったと考えられる。したがって逆にカトリシズムを以って国を治めないことには、治まりがつかなかったという矛盾も抱えてきたのだ。

スペインは「理」と「法」を前面に出す建前型の人

だが人間の表情は、それだけによるものではなく、制度や宗教とどう向き合い、異文化をどう受け入れるかという、受容の仕方の違いが根底にある。

歴史学の立場では、南欧には厳密な意味での封建制度は成立しなかった、と指摘されている。北フランスやイギリス、ドイツのように、物事の解決にまず法を全面に押し出してくるのに対して、南欧では情緒的に解決する傾向が強いようである。

一つの例が、世界最古の四大学と称されるヨーロッパの四大学のうち、オックスフォード大学、パリ大学は、法学部の設立をもって大学の創立年としている事実がある。これに対して、イタリアのボローニャ大学

間社会ではなく、「情」が幅を利かす本音型であるという言い方もできることになる。

したがって彼らの思考方法や習慣の違いは、宗教や教育、生活空間の変化のような、外的要因によって付加的に身に付いたものではなく、自然との対峙、ないしは受容の過程で身に付けた、自然育成型ともいべき要因によって身に付いたものと解釈される。それだけ地中海型の人間たちは、自然との関わり方が濃厚なわけである。

だが世界を見渡せば、近代文明の所産である電波・映像文化が、予想以上のスピードと深度で、思考や習慣のあり方に拍車をかけてきた。人々は電子機器の前に釘付けになり、メールのやり取りで済ませてしまいう人間関係は、人と人とが直接的に接触する機会さえ奪い取ってしまったている。

こう見てくると尚更のこと、祭にうつつを抜かし、居酒屋で声高に喋りまくっているスペインの人たちの方が、人間の生き様としてはより健全なようにみえる。だが彼らは祝祭日だけではなく、享楽や娯楽を伴う日常の時の流れの区切りも、伝統的な暦によって守ってきたのである。